

## 国語部 教科提案

### 「『きく』を育む国語学習の創造」

国語部：清水 良，大塚健太郎，西川義浩

#### 1. 本校国語科の目標

本校国語部は、「きく」ことを主軸に目標を据える。それは、「話すこと」「読むこと」「書くこと」と言った言語表出しやすい行為の前には、必ず内的に取り込む「きく」という行為がなされないと考えるからである。つまり、国語部がとらえている「きく」とは、音声言語の理解だけではなく、状況や沈黙の把握、テキストから浮かび上がるコンテキストの理解、文字から浮かび上がる語感のとらえ、安心できる場といった非言語情報をも含めた対象にかかる能動的な行為を含んでいる。では、その「きく」ことによって何が起こり、何を目標としていくのか。言語情報・非言語情報を含めて正確に「きく」ことができたとしても厳密な意味では、正確な理解はありえない。それは個々人の中で起こるずれが生じるからである。第1に、話者が言葉で発した時に起こる話者内のずれ。第2に、放たれた言葉の理解と意識のずれ。第3に、きき手が自己内に取り込んだ時に起こるずれ。第4に、自他の関係性からのずれ。第5に、話の進行(文脈)からのずれ。第6に、場の状況からのずれ。これらのずれが、「きく」行為において、自己内に理解と思考の生産と創造を生み出していく。それらがさらに編み出すものは、自己確立、自己発見、自己更新、自己改革を経ての自己内の人間形成、そして人間関係の改善と深化、成果物としての創造が考えられる。「きく」ことは、単なる情報のインプットではなく、自己内の人間形成、相手との人間関係、対話から生まれる創造を含めている。本校国語部が目指す「きく」とは、自己内対話を繰り返しながら核となる人間形成を育むとともに、他者に触れ、ずれと向かい合いながら他者を尊重して共生していく姿勢を育むことを目指している。そういった自己と他者とのやりとり自体がシナプスのように編みめぐらされ、グループ、学級、学校、社会の文化生成へと寄与していくと考える。「きく」ことによってずれるこの一連の過程を「おもしろい」と思うようになった時、初めて「きく」行為を有益に感じる言語生活者となる。上記を踏まえ、教科目標を以下の二点とする。

- ・きく技能を活用しながら様々な対象を言葉でとらえ理解する。その際に用いられる言葉そのものも対象とする。
- ・対象とのかかわりを通して、自分の思いや考えを形成し深めながら自己を確立するとともに、他者を尊重する態度を育てる。対象とのかかわり自体に意味を見出し、楽しむ態度を育む。

#### 2. 目指す子ども像

- ・「揺るがない核となる自分と揺さぶられる謙虚な自分」を包括する子ども
- ・「きく」ことが「楽しみ」や「快さ」である子ども

#### 3. 育てたい力

・「きく」力... 「きく」力を三つの資質・能力に分類し、それがはたらく意識を六つに分類する。

(1) 三つの資質・能力

構え・姿勢... 従来からの聞く態度に加え、「ききたい」という自己欲求や「きく」度量、「きいた」ことによる自己効力感などを示している。

知識・技能... 「きく」対象の理解、「きき」方の理解と活用を示している。

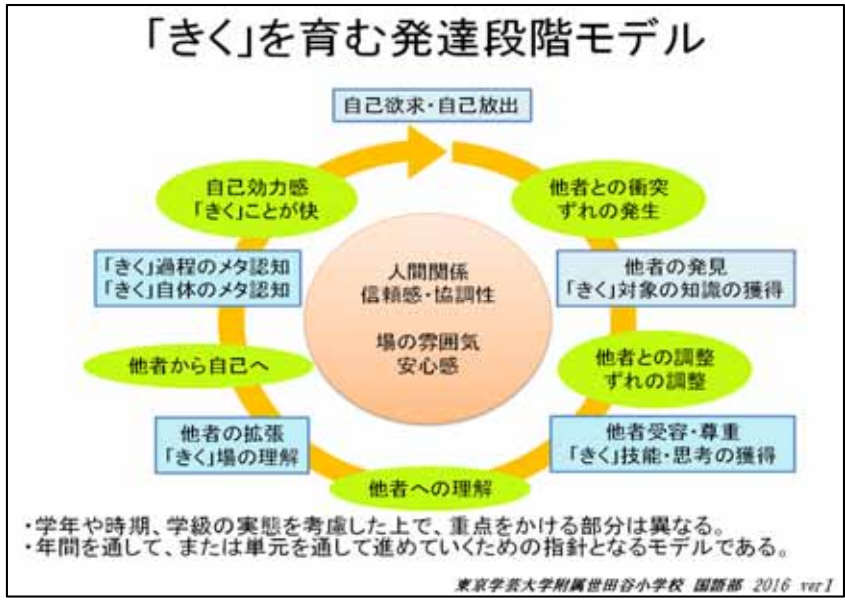
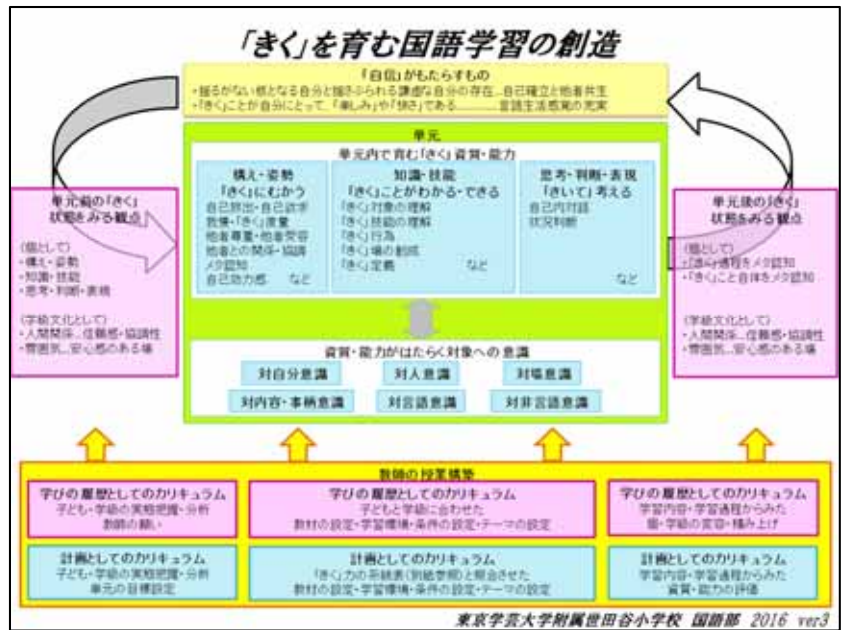
思考・判断・表現... 知識・技能を活用した上で、発揮される自己内で行われる部分の資質・能力を示している。

(2) 対象となる六つの意識

- 対自分意識
- 対人意識
- 対場意識
- 対内容・事柄意識
- 対言葉意識
- 対非言葉意識

それぞれの意識にはたらく

「きく」力の系統，評価方法については，当日資料とする。



4. 本提案における教師の手立て

- 「聞くこと」をとらえ直して，子どもを見つめ直す。
- 「その子」をみた解釈を複数の人物から集積し，分析・考察をする。
- 「系統表」「発達段階モデル」と照らし合わせて，授業の構想を練る。
- 「その子」に適した学習材を選ぶ。
- 「その子」に合った足場かけ（テーマの設定・言語環境・助言・机間指導など）をする。
- 「きく」過程や「きく」ことそのものをメタ認知する機会（ふりかえり活動など）をもつ。
- 「系統表」「発達段階モデル」を検討・改善する。
- 次の授業考察を次に活かす。